

1: 【The Black Note】第7話 紐解かれた思い出

2:  
3: ■オープニング  
4: セレスモノローグ「後の世に、闇の書・ブラックノートと呼ばれた書物がある。それは、12の精  
5: 霊核の伝説の裏に隠された歴史を書き記した漆黒の表紙の書物だった。決して歴史の表に晒  
6: されることのなかった哀しくて、切なくて、心がおしつぶされてしまいそうなほどの真相。  
7: でも、それは飾られた偽りではなく、紛れもない真実——」

9: ■タイトルコール

10: デュレ「The Black Note 第7話 紐解かれた思い出」

11: ■本編

13: //アルケミスタの高台で。

14: SE：草をかき分けるような音  
15: SE：そよ風の吹くような……？

16:  
17: シリア「……やはりここにいたのか、アルタ」  
18: アルタ「——よく、ここが判ったな……」  
19: シリア「……ここは思い出の場所だろう？ お前と……バッシュの」  
20: アルタ「お前もよくそんなことまで覚えている。——あの頃、シリアも若かったな、まだ、何でも  
21: 出来ると信じていた頃だ」  
22: シリア「ああ、オレもそう信じていたかったよ」

23:  
24: SE：激しく草をかき分ける音。

25:  
26: バッシュ「はあはあ……、アルタ！」  
27: アルタ「バッシュ？」  
28: バッシュ「捜してた。ずっと、三百年。どこに行っていた？」  
29: アルタ「何故、お前がここにいる？ お前はシメオンに……」  
30: バッシュ「あたしはここにいる。そんなことより、アルタ。この三百年どこに行っていた。あたし  
31: はずっと待ってた。すぐに帰ってきてくれると信じてたのに」  
32: アルタ「そんな、バカなっ！」  
33: バッシュ「バカな？ あたしが言いたいっ、お前はあたしを置いて、セレスを連れてどこに行っ  
34: いた？ 三百年も何をやってた。判るか？ あたしの淋しくて、やるせなくて、切なく  
35: て、どうにもならない気持ちを……」  
36: アルタ「——すまない」  
37: バッシュ「すまない？ お前はそんな一言で終わりにするつもりなのか！ このあたしの気持ち  
38: を」（アルタに遮られる  
39: アルタ「終わりのつもりはないよ。ただ、今更、何を言っても変わらないさ……」  
40: シリア「アルタ……。そう言わず、バッシュのところに帰れ」  
41: アルタ「帰れるのなら、もうとっくに帰っていたさ。……なあ、シリア。もう、手遅れなんだろ  
42: う？ もう、元には戻らないんだろう？ だったら、最後まで俺の好きにさせるよ」  
43: シリア「しかし、少しはバッシュのことも……」  
44: バッシュ「あ……あたしのところに帰ってきて……」  
45: アルタ「帰れない——。俺は行くよ」  
46: バッシュ「どうして！ どうして、あたしを置いていく！」

47: アルタ「……バッシュ？」  
48: バッシュ「今まで、好き勝手にやってきて、それでもまだ足りないのか。帰ってこい！ 何も言わ  
49: ない。今まで何してきたかなんて、聞かないから。あの時のようにみんなで暮らそう……」  
50: アルタ「……上手くいったら、また、会える。失敗したら……それで終わり。ただ、それだけのこ  
51: と……。それだけのことなのさ」

52:  
53: SE：去っていく足音。  
54: SE：草むらるるような音。

55:  
56: セレス「母さんっ！ 父さんは？ 父さんはどこ？」  
57: バッシュ「セレス、どうしてここに！」  
58: セレス「教会から母さんの後を追ってきたら……。けど、途中で見失って」  
59: バッシュ「セレス——」  
60: セレス「何？ かあ……。あ——バッシュ」  
61: バッシュ「——母さん……か……」  
62: セレス「ち、違うよ？ ただちょっと、口が滑っただけ……。うん、いや、バッシュが母さん  
63: に……あまりに似てたから、つい……」  
64: バッシュ「もう、隠さなくてもいいんだよ——。前から気づいていた。本当はずっと言わないつも  
65: りだったんだけどなあ……」  
66: セレス「……母さん」

67:  
68: //瓦礫の教会で・緊張感全開で。  
69: SE：何かがくすぶる音があればいいな。

70:  
71: デュレ「あなたの目的は一体、何なのですか。わたしには……理解できません……」  
72: レイヴン「無理に理解する必要はないな……。理解するほどの内容もない」  
73: レイア「こんな事をしておいて、まだ、そんなことを言うつもりなのですか？」  
74: レイヴン「必要であれば、手段を選ばない。それが戦いだろう？」  
75: デュレ「……これは戦い……？ そんなにまでして何かを得る意味なんてあるのですか？」  
76: レイヴン「——小娘に教える道理はない。どうしても知りたければ最後まで生き残れ」  
77: デュレ「そのつもりです、……ですが、あなたの目的はアルタとは違う……のですか？」  
78: レイヴン「さあどうかな？（深呼吸）天空に住まう光の意志よ。我が右腕に宿り、全てを滅せよ」  
79: レイア「デュレ！ 下がって——」

80:  
81: SE：レイア、デュレを突き飛ばす

82:  
83: レイア「深遠なる闇の支配者・シルト。闇の使者、レイアの思いを聞き届け、光の魔力を還元し、  
84: 純粋なる汚れなき精神の営みに帰結させなさい」  
85: レイヴン「ターゲット」  
86: レイア「——我らを悪しき精霊使いより守護する結界を求めろ」

87:  
88: SE：剣の倒れる音  
89: SE：レイア、飛びついて剣を手取る音。  
90: SE：剣を地面に突き刺す音

91:  
92: レイア「……守護結界っ。デュレ！ わたしのうしろに」

93: レイヴン「光弾（こうだん）」  
94:  
95: SE:破壊魔法の音。  
96: SE:結界と魔法がぶつかる音。空気がびりびりと振動（風の吹くような）。  
97:  
98: レイア「くうっ！」  
99: レイヴン「……いつまで、そのままのつもりなのかな？」  
100: レイア「……デュレっ！ 攻撃を……！」  
101: デュレ「はい！」  
102:  
103: SE:デュレ、深呼吸。  
104:  
105: デュレ「深遠なる闇の支配者・シルト。我は闇の使い手、デュレ。闇は邪にあらず、追憶の彼方に  
106: 住まう孤独の思考。我が呼び声に応え、闇の真髄、内に秘めた燃えさかる漆黒の情熱を示  
107: せ」  
108:  
109: SE:炎が出現して、魔法で加速！  
110:  
111: デュレ「ダークフレイム（一呼吸、置いて）フライングスベル・アクセラレーションっ」  
112: レイヴン「シールドっ！」  
113: デュレ「行けっ！」  
114:  
115: SE:スピードアップの音？  
116:  
117: レイヴン「何？」  
118: デュレ「やった？」  
119:  
120: SE:レイアがレイヴンに切りかかる！  
121:  
122: レイア「たああああっ！」  
123:  
124: SE:剣の交錯する音  
125:  
126: レイヴン「おっと。今のはなかなか良かったぞ」  
127: レイア「そうですか？」  
128: レイヴン「剣ならば、互角と思ったのか？」  
129: レイア「そのようなことは全くありません」  
130:  
131: SE:剣と剣をあわせ二人は飛び退く。そして……。  
132:  
133: レイア「デュレ、サポートをお願いします」  
134: レイヴン「ほうっ！」  
135: レイア「……楽しませたら、文句はないんですね？」  
136: レイヴン「まあ、文句はないが——。……フレイムショット！」  
137:  
138: SE:フレイムショットの黒い玉がたくさん飛んでいく音。と吸い込む音。

139:  
140: デュレ「フォワードスベル・ピンポイント」  
141: レイア「今だ！」  
142:  
143: SE:ギィィィン。  
144:  
145: レイヴン「少し、油断したな」  
146: レイア「ちっ！」  
147:  
148: SE:剣と剣のぶつかる音。  
149:  
150: レイア「我、水と雷の使い手・レイア……」  
151:  
152: SE:そっと魔法の呪文が唱えられる雰囲気。そして、剣を投げつける！  
153:  
154: レイア「デュレ、代わってください！」  
155: デュレ「え……、ええ？ わたし、剣はちょっと——」  
156: レイア「判っています。黙ってもってればいいのです。それは放さないでください。——これで  
157: 少しは後悔してくれると有り難いんですけどね——ターンアップ」  
158:  
159: SE:キュイン、キュインと複数の音。小さな魔法陣の展開する音。  
160:  
161: デュレ「凄い……。空中に魔法陣が……」  
162: レイヴン「イリミネイトトラン……」  
163: レイア「そうはいきません！ ウォーターストリームっ！ キャリアアウト！」  
164:  
165: SE:魔法が発動するときに魔法陣が消える音。そして、水がダバダバ。  
166: SE:サンダーstorm、びりびり。  
167:  
168: レイヴン「……何のつもりだ？」  
169: レイア「こう言うつもりですよ（クスリ）サンダーstorm、キャリアアウト」  
170: レイヴン「うあああ……。——こ、小娘の分際で小癪なまねを」  
171: レイア「そうですか？ 取って置きのがまだ残っています。これはちょっと珍しいですよ。——深  
172: 紅の煌めきを宿す異彩の精霊・サラマンダー。我、レイアの名により召喚する」  
173:  
174: SE:何かが登場する音。（ぼひゅん）  
175: SE:よるよる、とことこ  
176:  
177: レイヴン「サラマンダーって、そのちっこのがサラマンダーか？」  
178: レイア「そうですよ。さあ、やっておしまっ！」  
179: サラマンダー「（ぎゃーとかうおーとかケモノの雄叫び？  
180:  
181: SE:炎がぼーっとでる。  
182:  
183: レイヴン「シールド。……最後の最後で、あほらしいことをするな……」  
184: レイア「どうせ、レイヴンには敵わないと思っていましたから、試しに……」

185: レイヴン「ふっ。余裕だな。レイア。俺はお前のそう言うところが好きだ。さてと、ま、この程度  
186: なら我らが後れを取ることもあるまい。そろそろ……」  
187: レイア「逃げるのですか、レイヴン」  
188: レイヴン「逃げはしないさ。……5月24日、——待ってるぜ」  
189:  
190: SE：レイヴン、空間転移魔法。移動する音。  
191:  
192: レイア「パーミナイトトランスファー……か。——はあっ、もうダメかと思いました」  
193: シェラ「レイアが弱音を吐くなんて珍しいですね」  
194: レイア「天使が相手なのは久須那さん以来だし、手加減してくれない分、レイヴンは」  
195: シェラ「手加減はしていましたよ。——あれを手加減というのだったら……ですが」  
196: レイア「え……？」  
197: シェラ「レイヴンが加減してくれていなければ、わたしたちは今ごろ、瓦礫の下だったはず……」  
198: レイア「それが瓦礫の下になっていないと言うことは……」  
199: デュレ「地下墓地大回廊で待つ……。アルタとレイヴンは一体、何を考えているのかしら……」  
200: (独り言のように)  
201: レイア「レイヴンは何かを企んでいるということですね」  
202: デュレ「……。レイアさん。あの、地下墓地大回廊に、いえ、そのシメオンに……。あー、けど、  
203: セレスたちは……どうしよう……」  
204: レイア「どうかしたのですか？」  
205: デュレ「いえ……。わたしたちはシメオンに戻った方がいいかと思っただけです。うまく言い表せ  
206: ないんですけど、何故か、いつまでもアルケミスタにはいけないような気がして……」  
207: シェラ「そうですね。一度、アルケミスタを離れた方がよさそうです」  
208: デュレ「でも、セレスたちが……」  
209: シェラ「……あなたはセレスにフォワードスベルの閻魔符を渡していたはず。きっと、察して戻っ  
210: てくると思いますよ」  
211: デュレ「そこが少し心配なんですけど……。——フォワードスベル！」  
212:  
213: //氷の洞窟。  
214: SE：水滴の音。と微かな足音。  
215: マリス「わたしはどこに行けばよい？ ——レイヴン、レイヴン」  
216: レイヴン「わたしはここにいる」  
217: マリス「そうか……」  
218: レイヴン「シメオンの……地下墓地大回廊に……。5月24日……」  
219: マリス「5月24日か……。いよいよ、あいつらと決着を着ける時が来た……」  
220:  
221: //場所はサムsの地下室で。  
222: SE：空間転移魔法で移動して来た音。  
223:  
224: デュレ「全員、無事ですな？」  
225: レイア「シェラさん？ 無事ですか？」  
226: シェラ「……ええ、無事ですよ」  
227:  
228: SE：魔法が発動して、どしんと言う音と。ホコリを払うような  
229:  
230: セレス「ったあぁ！ もう、どうして、こう、デュレの魔法ってがさつなのかしら。サイテー」

231: セレス「バッシュ？ リボンちゃん？ ちゃんという？」  
232: シリア・バッシュ「いるよ」  
233: デュレ「……誰かがさつでサイテーなのかしら？」  
234: セレス「げっ、もしかして、聞いてた？ って言うか、いたんだ？」  
235: デュレ「い・ま・し・たっ！」  
236: シリア「何をやってるんだ？ もう、遊んでる暇はないんだぞ。マリスの」  
237: シェラ「マリスの氷の封印が解けたようですね」  
238: シリア「流石はシェラだな」  
239: シェラ「ええ……。天使の大きな魔力ですからね、封印が解ければ気が付きます」  
240: デュレ「封印が解けたってどういうことですか？」(あせり  
241: シリア「どういことだと言われてもな。そのままの意味でそれ以上でもそれ以下でもないし」  
242: セレス「あの～。とにかくここから出ようよ。あたし、暗くて狭いところ嫌いなんだってば」  
243: デュレ「え？ ええ……」  
244: シリア「そうだな。ここに長居するのは良くない」  
245: バッシュ「じゃあ、あたしんちに行かないか？ サムを留守番に置いてきたから、心配なんだ。あ  
246: いつ、放っておいたらうちにある保存食料、全部喰っちゃまいそうで……」  
247:  
248: SE：複数人がぞろぞろと歩く。  
249: SE：ドアが開いて。  
250:  
251: サム「ようっ！ 何だ？ てめえら。やけに早かったじゃねえか？ 帰ってくるなんて思ってねえ  
252: から、飯なんか作ってねえぞ」  
253: セレス「うわっ！ いきなり、キミかい！」  
254: サム「お～お、帰ってくるなり、ひでえ言い草なこと。折角……」  
255: ちゃっきー「やあっ！ チミたち。ご機嫌麗しゅう？ 全くよお。どいつもどいつもおいらのこと  
256: 無視しやがって～。おいらの思いの丈を聞いて欲しいの～。喰らえ、必殺、マシンガント  
257: ク！」  
258: サム「うるせえ」  
259: ちゃっきー「ひう～。たまにはおいらに出番をよこせ。喋らせろ、喋らせろ、喋らせろっ！」  
260: バッシュ「黙れ」  
261: ちゃっきー「むぎゅう。——」  
262: バッシュ「そ、それより、食材は無事か？」  
263: サム「おいおい、幾ら俺でもそこまでひどいことは……」  
264: バッシュ「——してないようだな、安心したよ」  
265: サム「少しは信用しろよ。てめえはよ。もう、付き合い長いだろ？」  
266: バッシュ「長い付き合いだから余計に信用できん」  
267: サム「あっそ。ま、いいわ」  
268: デュレ「ところで、リボンちゃん？ これまでの成り行きを考えると12の精霊核の伝説をおさら  
269: いする必要があると思うんですが、どう思いますか？」  
270: シリア「もう、これ以上は知らない方がいいと思うけどな、オレは……」  
271: デュレ「そうでしょうか？ 中途半端に知っているだけでは上手くいくはずがありませんよ？」  
272: セレス「え～、あたし、勉強って大嫌いなんだよねえ」  
273: デュレ「いいえ、隠していることを全部、包み隠さず正直に話してください」  
274: シリア「どうしても知りたいか？」  
275: デュレ「ええ。今後、マリスと対峙しなければならぬことを考えると、避けられませぬ。わた  
276: したちがコテンパンにされてもいいのなら構いませんが……」

277: SE：足をばたと慣らす。  
278: SE：足をばたと慣らす。  
279: SE：足をばたと慣らす。  
280: バツシュ「あたしも知りたい」  
281: シリア「バツシュもか？」  
282: バツシュ「ああ、長年お前につきあってるが、12の精霊核の伝説のことは一度も話したことはな  
283: かったよな。だから、聞きたい」  
284: サム「俺にも聞かせるよ。なあ、いいだろ？」  
285: シリア「——お前は久須那に聞いてるだろ？」  
286: サム「いいや、特に聞いてないな」  
287: シリア「……ウソつけ」  
288: サム「ま、ともかくよ、聞きたいっていつてんだから、聞かせてやればいいだろ？」  
289: デュレ「そーです。包み隠さず、話してください。リ・ポ・ンちゃん♪」  
290: シリア「オレは……知らない方がいいと思うが……無知は時として罪。しかし、知っていることが  
291: いいこととは限らない。無用の知識はお前の判断を鈍らせるような気がしてならない」  
292: デュレ「そのようなことは絶対にありません」  
293: シリア「それはどうかな？ 聡明なお前なればこそ判断に窮するとオレは思うのさ。伝説の中身  
294: ——勸善懲惡だと思うか？」  
295: デュレ「いいえ」  
296: シリア「だろ？ お前は割り切れない思いをする。ま、セレスなんか、知っても知らなくても変わ  
297: らないような気はするが？」  
298: セレス「そりゃ、あたしがバカだって言いたいのかい？ ひっどいわあ、こ〜んな可愛いのに」  
299: シリア「ユニークだとは思ってるが、バカだと思ったことはないぞ？」  
300: バツシュ「……いつも思うが、その長い前置きは何とかならないのか？ リボンちゃん♪」  
301: SE：バツシュキッチンから珈琲カップを持って登場。  
302: SE：バツシュキッチンから珈琲カップを持って登場。  
303: SE：バツシュキッチンから珈琲カップを持って登場。  
304: シリア「リ？ リボンちゃん？ お前はそう呼ぶなっ！」  
305: バツシュ「細かいことを言うな。ホラ。時間が無いと言っても慌てるほどでもないだろ？ 珈琲を  
306: 飲みながら、話をしろよ……」  
307: シェラ「わたしもシリアから聞いてみたいですね、12の精霊核の伝説……。レイアもそうは思い  
308: ませんか？ わたしたちの一族に伝えられたものと、生き証人の語る伝説の相異を比べてみ  
309: るのも一興だと、わたしは思いますよ……」  
310: レイア「同じではないと……？」  
311: シリア「確かに同じではないかもしれないな……」  
312: シェラ「ええ、あなたが見て聞いたものをわたしは知りたいのです」  
313: シリア「シェラに言われたらな……。……判った。いつか真実を伝えねばならないのだからとは  
314: 思っていた。……もっと、先のことだと思ってたし、ずっと考えないようにしてたから  
315: なあ。心の準備が……。——セレス。まずはお前の知ってる“伝説”を言ってみる」  
316: セレス「何で、あたしかなあ。暗記ごとは苦手なのに」  
317: シリア「うる覚えでも何でもいいんだよ。知ってることを言え」  
318: セレス「わ、判ったけど、ちょっと待ってね。え〜え〜。十二個の精霊核。協会がまだ黎明期に  
319: あった頃。一つの事件があった。時の協会天使長が……。確かあ。その時の協会は、異端・  
320: 精霊狩りをやってたのよね？ で、その天使長は精霊核をたくさん集めた。天使たちの住む  
321: 世界とあたしたちの住む世界との境界を破壊するたのに。その為には十二個の精霊核が必要  
322: だったのよね？」

323: シリア「何だ、よく知ってるじゃないか」  
324: デュレ「けど、それだけじゃありませんよ。セレス？」  
325: セレス「うん、判ってる。それを阻止したのが、久須那と申（しん）という退魔師とサムっていう  
326: 剣士」  
327: サム「それでその先は？」  
328: セレス「ともかく、その人たちで天使長を倒して、事なきを得たんでしょ？ そして、傷んだ精霊  
329: 核をシェイラル司祭とレルシア枢機卿が封印してどこかに運んだらしいんだけど……」  
330: デュレ「わたしたちが知り得た“伝説”はここまでです。教科書に載っている分は超えているけど。  
331: ……たった、これだけを知るのに数か月かかりました。それなのに、精霊核のある場所も、  
332: その境界のあるところも、何も判りません……」  
333: シリア「想像以上に知ってるじゃないか？」  
334: デュレ「でも、これは表面的なことさえ、欠けらに過ぎないんじゃないんですか？」  
335: シリア「ふ。まあ、そうだろうな。だが、普通はそこまでは調べられないのさ。仮に知っているヤ  
336: ツがいたとしても、喋らないよ。お前たちの知っていることは公式の伝説にはないからだ。  
337: 公式の伝説にないことを吹聴すると言うことは……」  
338: デュレ「すなわち、異端。——知っていても、教えられないことの一つ——」  
339: シリア「そうとも言えるな。だから、お前たちの知る“十二の精霊核”の伝説は全体の半分に過ぎな  
340: い。つまりは……久須那が天使長になった辺りまでのことだな。残りの半分は闇に消えた  
341: よ……」  
342: シェラ「その通りですね。わたしたちにはもう少し知らされていますが……」  
343: シリア「そりゃそうだ。封印の維持管理はオレたちの役目だったからな。が……。シェラはあのこ  
344: とのほぼ全体を見渡すことをできるはずだ」  
345: セレス「な、ちょっと、それはどういう意味？」  
346: デュレ「あなたは少し黙って聞いてなさい」  
347: シリア「シェラは察しているんだろう？ 当時、シェイラルとオレ……久須那もそうなるんだろう  
348: な。ま、いい。オレたちが“伝えなかったこと”を？」  
349: シェラ「ええ……。でも、それをあなたの口から聞きたいのですよ。シリア」  
350: シリア「ずるいな。シェラも……」  
351: シェラ「手の内は最後まで明かさないものです……」  
352: シリア「そうだな、正しい判断だ。いいか、心して聞けよ？ オレが12の精霊核について語るの  
353: はこれが最初で最後だ。聞き逃しても、二度とは話さない。それから、誰にも喋るな」  
354: セレス「うん。判ったよ」  
355: デュレ「はい、判りました」（セレスとデュレのセリフはかぶせて）  
356: シリア「……オレが久須那と初めて会ったのは千二百八十八年前ほど前。今でもよく覚えている。  
357: 雪が珍しいこのリテールで……雪が降りしきっていたよ。その頃、オレはホンのガキで自分  
358: の力もまともに操れなかった……。ゼフィもよく呆れてたよなあ……。ゼフィ……」  
359: SE：涙のこぼれる音？  
360: SE：涙のこぼれる音？  
361: SE：涙のこぼれる音？  
362: //場面・回想  
363: SE：雪の降る音  
364: SE：雪道を歩く音。  
365: SE：雪道を歩く音。  
366: シリア「さ、寒いよ。ゼフィ……」  
367: ゼフィ「寒いよと言われても、シリアがきちんと魔力をコントロールできないから、こんなコトに  
368: なるんです。だから、毎日、口を酸っぱくして言ってるでしょう？ 基本をおろそかにせず

369: に……」  
370: シリア「あ〜もう、判ったよ。ゼフィ。これからはちゃんとするから、何とかして……くしょ  
371: んっ！」  
372: ゼフィ「……シリアの風邪が治まるまでは無理そうですね？」  
373: シリア「そんなぁ……。くしょんっ！ あ〜鼻水……」  
374: ゼフィ「氷の精霊王になる方が情けない」（ため息）  
375: シリア「そんなことを言ってもしょうがないだろ。宿屋の親父が『犬は外で寝てくださいね』だと  
376: か抜かすから。ゼフィだってそうだ。何が『あら、そうなの？ シリアちゃん、今日は外で  
377: おねんねね』だ？ 他の宿を探してくれてもいいのにっ！」  
378: ゼフィ「あの村にはただ一件の宿よ？ それとも、シリアはわたしに野宿を――？」  
379: シリア「そ、そんなこと言ってないもんっ！」  
380:  
381: SE：ざくざく。足音。  
382:  
383: 久須那「しかし……。昨日、今日と随分、雪が降りますね？」  
384: レルシア「……ええ」  
385: 久須那「レルシアさま？」  
386: レルシア「え？ ……はい？ 何か言いましたか？ 久須那？」  
387: 久須那「いえ、別に。こんなに雪が降るのは珍しいと……」  
388: レルシア「ひょっとしたら、あそこを歩いている不思議なカップルのせいかもしれませんよ？ 子  
389: ものオオカミと……精霊の女の人……でしょうか？」  
390: 久須那「そうですね。ただ、子どものオオカミはフェンリルのように、女の人はフラウ？」  
391: レルシア「だとしたら、この降り止まない雪の原因はあの子かもしれませんね」  
392: 久須那「あの子？ あの子ってあの子？」  
393: レルシア「ええ、今、大きなくしゃみをしましたよ。ちょっと、お話ししてきましょうか」  
394:  
395: SE：雪道を歩く音  
396:  
397: 久須那「し、レルシアさま。急ぎ足は危険です。もっと、ゆっくり……。――うわっ！」  
398:  
399: SE：久須那、滑って、後ろにひっくり返る  
400: SE：足音  
401:  
402: シリア「……ねえ、ゼフィ……。鼻……かみたい……。ど、したの？ ゼフィ？」  
403: ゼフィ「全部使い果たしました。そのだらしのないお鼻さんのおかげでね？ はな垂れくん？」  
404: シリア「は？ はな垂れくんって！ ゼフィでも言っていることと悪いことが……はっくし。あ  
405: 〜……」  
406: ゼフィ「……情けないですね」  
407: レルシア「――、どうぞ、これをお使いください……」  
408:  
409: SE：紙、もしくはハンカチを差し出す音。  
410:  
411: ゼフィ「え……。あ、ありがとうございます。シリア、お礼を……」  
412:  
413: SE：鼻をこする  
414:

415: シリア「ありがとう……。ごじゃいまひゅ」  
416: レルシア「どちらから、お越しに？」  
417: ゼフィ「北リテールの山奥から、この子がどうしても中央に来たいというものだから」  
418: シリア「違うよ。父上が行けて。オレは嫌だって言ったのに」  
419:  
420: SE：シリアの頭をたたく、ベンベン。  
421:  
422: ゼフィ「何事も修行です。そう言われてきたのでしょうか？ お父様に？」  
423: シリア「そうだけさあ？ 寒いし、雪降ってるし、人がたくさんいるところは落ち着かないか  
424: ら嫌い」  
425: ゼフィ「苦手を克服しなさい。とも言われませんでしたか？」  
426: 久須那「し、レルシアさま。そ、そちらは……？」  
427: ゼフィ「あら、わたしとしたことが……。わたしはゼフィ。こっちはな垂れくんはシリアです」  
428: シリア「だから、はな垂れくんって言うなよ。ゼフィ！」  
429: ゼフィ「けど、ホントなんだから仕方がないでしょう？ はい、ち〜んして？」  
430: シリア「い、いいよ。格好悪い……」  
431: レルシア「ふふ。可愛いですね♪ そう、わたしはリテール協会にて枢機卿をつとめさせて頂いて  
432: いるレルシア。こちらは天使長・久須那……」  
433: 久須那「レルシアさま、天使長と呼ぶのはやめてください。どうも、落ち着かない」  
434: ゼフィ「協会の方なのですか？」  
435: レルシア「そうですね。ですが、以前のような精霊狩りはもう行っていませんから、安心してくだ  
436: さい」  
437: ゼフィ「……そうですか……」  
438: シリア「くしょっ！ ……ゼフィ、鼻……」  
439: 久須那「あ……」  
440:  
441: SE：ごしごし。  
442:  
443: シリア「あ……ありがとっ」  
444: 久須那「どういたしまして。――レルシアさま、いつまでも立ち話も何です。近くに手頃な喫茶店  
445: を知っていますから、そちらで……。――仕方ない、引っ張っていか。レルシアさま、行  
446: きますよ。ゼフィさんも」  
447: シリア「ゼフィ？ 喫茶店だって。ホラ、行こうよ……。……ねえ、オレは入れるの？」  
448: 久須那「精霊を追い出すようなお店はシメオンにはないよ」  
449: シリア「ホント？ ゼフィ、行こうよ」  
450:  
451: SE：シリア、ゼフィを引っ張る  
452:  
453: シリア「ねえ、ゼフィったら……。くしゃんっ。……あ〜、かっご悪い」  
454: 久須那「シリアくんの風邪がこれ以上ひどくなってはたまりませんよ。レルシアさま？」  
455: シリア「くしょんっ」  
456: レルシア「……そうですね。史上空前の大雪になったら、困りますし。久須那、案内してくださ  
457: い」  
458:  
459: //喫茶店に入店。  
460: SE：呼び鈴がかららんらん

461: SE：足音。  
462:  
463: 女主人「いらっしゃいませ。あら、久須那さん、ここどころ、まい……」  
464: 久須那「あ、しい〜」  
465: レルシア「每……日？」  
466: 久須那「そうだな。(ごまかそうとして) 紅茶と……シリアくんはミルクか……？」  
467: シリア「雪が積もらなきゃ、何でもいいよ」  
468: 久須那「じゃあ、それで頼んだよ」  
469: 女主人「はい、かしこまりました」  
470:  
471: SE：ゼフィのアミュレット、キラリ。  
472:  
473: 久須那「そのペンダントは……アミュレット……ですか？」  
474: ゼフィ「——あら、魔法アイテムに詳しいのですね？」  
475: 久須那「その六芒星の真ん中に収められているのは白い精霊核——。あなたの？」  
476: ゼフィ「ええ。そうです……」  
477: 久須那「誰が……？ アミュレットを作れる職人は限られているし。それに精霊核の欠けらをはめ  
478: 込むスキルを持つ魔術師も、また希少と呼べる数しかない……」  
479: ゼフィ「このアミュレット……。テレネンセスの司祭、シェイラルさんが作ったものなので  
480: す……。けど、テレネンセスは壊滅したと聞き及んで……」  
481: レルシア「そのシェイラルさんって、わたしのお父さん……。しかも、生きてるし……」  
482: ゼフィ「——え？ けど、狼(オオカミ)王さまが……」  
483: シリア「ゼフィの早とちりなんじゃないの？」  
484: ゼフィ「何ですって？」  
485: シリア「だってさあ？ 中央リテールの様子とそのおっさんに会って来いとは言ったけど。死んだ  
486: とか、いなくなったとかは言ってなかったよ？」  
487: レルシア「ゼフィとシリアはお父さん、いえ、シェイラルに会いに来たのですか？」  
488:  
489: SE：足音とカップかちやかちや。  
490: ・女主人と久須那のセリフはレルシア、ゼフィの会話の裏でのやり取り。  
491:  
492: 女主人「どうぞ」  
493: 久須那「ありがとう」  
494: ゼフィ「……正確にはちょっと違います。シリア、全部、話してもいいのですか？ 決めるのはあ  
495: なたですよ？」  
496: シリア「いいんじゃないの？ レルシアも久須那も信用できそうだし？」  
497: ゼフィ「……もっとやる気を出しなさいっ！」  
498:  
499: SE：しっぽを踏む。  
500:  
501: シリア「ぎゃんっ！ 何するんだよ。ゼフィ！ うう……、尻尾が足跡型に変形しちゃった。く  
502: しょんっ」  
503: ゼフィ「全く、困ったちゃんなんだから。いずれは狼(オオカミ)王さまの後を継ぐのですよ？」  
504: シリア「あ〜う〜、かっこ悪いよお〜。もお、話してもいいよ。だから、鼻水止めて……」  
505: ゼフィ「シリアがそう言うのでお話ししますね♪ ……とりあえず、精霊狩りに関する一連のゴタ  
506: ゴタには決着がついたようですよ？」

507: レルシア「完璧とは言い難いですが、しばらくは平穩に過ぎるかと思いますよ？」  
508: ゼフィ「そうだといいですね。——わたしたちが気にかけているのはこれからの協会の動向と」  
509: レルシア「と？」  
510: ゼフィ「狼(オオカミ)王さまは気付かれておいでです。新たな野望の芽が芽生え始めています。  
511: 狼王さまのお話だと、リテール全体を巻き込んだ大事(おおごと)になりそうとのこと」  
512: レルシア「そうですか……？」  
513:  
514: SE：お茶飲む。  
515:  
516: レルシア「……わたしたちに安寧の時は来ないのかしらね……？ 久須那？」  
517: 久須那「はあ……。それは狼王さまの予言……なのか？」  
518: ゼフィ「違いますよ。狼王さまは“予兆”を感じられるのです……。予言と言うほど何もかも、判っ  
519: ている訳ではなくて……。ええ、本人がそう言ってますから、間違いありませんよ」  
520: シリア「……何だか、父上をバカにされてる気分」  
521: ゼフィ「尊敬してます」  
522: シリア「説得力ないよね。ゼフィ。は……、くしゃんっ！ は〜う〜」  
523: ゼフィ「……はあ、まずはシリアの風邪を何とかしないと雪も降り止まず、さらに激しくなるばか  
524: り」  
525: シリア「ねえ、今晚はどこに泊まるの？ ゼフィ。それを決めてから、盛り上がってくれない？」  
526: レルシア「今日はどうですか？ わたしのうちに……」  
527: ゼフィ「しかし、ご迷惑では……？」  
528: レルシア「構いませんよ。むしろ、是非とも使って欲しいですよ」  
529: シリア「ねえ、ゼフィ？ 使わせてもらおうよ。また、この前みたいなこと言われたヤダし。ね？  
530: でないと、……くしょんっ！ あ〜。この街が雪の底になっても知らない……」  
531:  
532: SE：シリアの鼻を拭く  
533:  
534: ゼフィ「風邪がひどくなったら、本当にそうなってしまいそうですね……。お言葉に甘えて、二、  
535: 三日、お世話に……」  
536: レルシア「シメオンに滞在中、ずっといらしても構いませんよ」  
537:  
538: //現在に戻る  
539:  
540: シリア「——のどが渇いた……。パッシュ、水をもらえるか」  
541: パッシュ「ああ、いいぞ。ちょっと待ってろ」  
542:  
543: SE：歩く音。  
544:  
545: デュレ「……つまり。わたしがシェラさんからいただいたアミュレットは……？」  
546: シリア「つまり何も、その通りさ。その昔、それはゼフィの持ち物だった」  
547: パッシュ「ホラ、水だ。飲め」  
548: シリア「ありがとう……。って、お前は皿に入れてくるのかっ！」  
549: パッシュ「コップじゃ飲めないだろ、その口じゃ。今さら、何を言うか」  
550: シリア「もう少し、ましな入れ物があると思うんだけどな……」  
551: セレス「あのさあ。そのデュレのもらったアミュレット以外には今のお話と12の精霊核の伝説と  
552: の間にどんなつながりがあるんだか、あたし、さっぱり判らないんだけど？」

553: シリア「まだ、前置きだよ。取り敢えず、そのアミュレットは完全に無関係と言う訳ではない」  
554: デュレ「無関係ではありませんか……」  
555: シェラ「……この家には協会の紋章がありますね……」  
556: デュレ「ちょっと待ってください！ それって、つまり……」  
557: シリア「……多分、デュレの想像したとおりだと思うぞ。言ってみる」  
558: デュレ「まさか、ここはレルシアさまの家……？」  
559: シリア「そうだよ。と言ってもレルシアは大聖堂にほとんど入り浸りだったけどな。だから、オレ  
560: たちにシメオン滞在中は好き使ってもいいと言っていた」  
561: デュレ「あの、いいですか？ そうしたら、シェラさんは、ううん。シェイラール族はどこに住ん  
562: でいたのですか？」  
563: シリア「ふふ、シェイラール族って一口に言うけどな。たくさん居たんだけ。今でこそ、シェラし  
564: かないけどな……。まあ、その時はレルシアとシェイラルのおっさん、二人だけだった  
565: が、増えた。短い間だったけどな。楽しい時を過ごしたよ……」  
566: シェラ「楽しい時代でしたか……」  
567: シリア「ああ……」  
568: セレス「じゃあ、今はリボンちゃんの家？ あれ、だって、バッシュはリボンちゃんが居ついたん  
569: だって」  
570: バッシュ「ウソはついてないよ。なあ、シリア？」  
571: シリア「もちろんだ」  
572: シリア・バッシュ「(大笑い)」  
573: バッシュ「あたしとシリアの出会ったのはここじゃない。ここに来る前はちよいと野暮用で一年く  
574: らい王都・アイネスタにいてね。そっちで会ったんだ。それからシリアがあたしのうちに居  
575: ついて、ま、何て言うか、いい空き家を知ってるって言うから引っ越してきたんだ。前は  
576: もっと街の北にいたんだ」  
577: セレス「つまり。何？ バッシュはリボンちゃんの彼女かなんかな訳？」  
578: バッシュ「何、焼き餅焼いてるんだ？ お前？」  
579: セレス「だ、だって、あたしのリボンちゃん……」(もごもご。)  
580: バッシュ「そんなに心配することないだろ？」  
581: シリア「前も言ったような気がするかな？ オレはお前らの持ち物じゃない。その点を忘れるな。  
582: そして、デュレ。話の腰を折らないでくれ。いや、止めるのは構わない、だが、セレスに口  
583: を挟ませる隙を与えるな。あいつ、うるさいっ！」  
584: セレス「な、何だって、あたしばかり、やり玉に挙げるのよ？ バッシュだって、デュ……」  
585: デュレ「こっちを見ない」  
586:  
587: SE：デュレ、不機嫌そうにテーブルをコツコツ。  
588:  
589: セレス「あ、あははあ〜。はい、黙ってます……。その代わり、寝ても怒らないでね？」  
590: デュレ「寝たら怒るに決まっていますっ！」  
591:  
592: SE：ごちん。  
593:  
594: セレス「いったあ〜い。いちいち、ぶたないでよお！」  
595: デュレ「セレスみたいのには身体で判らせないとダメなんです」  
596: セレス「へ〜へ。もう、いいわ。大人しくしてるから続けて  
597: シリア「そうか？ ……全く、お前らといたら、退屈しないよ。……ゼフィもいたら」  
598: バッシュ「そう言う話はやめにしよう？」

599:  
600: SE：壁に寄り掛かっていたバッシュ、歩く。  
601:  
602: バッシュ「そう言うことはあとであたしがゆっくり聞いてあげるよ……」  
603: シリア「そうだな。続きに戻るうか。オレたちはレルシアの好意に甘えて、滞在中は世話になるこ  
604: とにしたよ。ふふ、懐かしいな。懐かしいよ……マリスやレイヴンとそう、迷夢もいたよ。  
605: 珍しいものが来てるんだって？ と言って、好奇心いっぱいの子どもみただった」  
606: バッシュ「そう言うお前は子どもだったんだろ？」  
607:  
608: SE：シリアの背中をナデナデ。  
609:  
610: シリア「ああ、あの頃はオレもホンのガキだったよ」  
611: セレス「リボンちゃんにもきちんと子ども時代があったんだね？」  
612: シリア「あのなあ、いきなり大人の姿で生まれてくるやつなんかいるか？」  
613: セレス「うふ〜ん♪ リボンちゃんならあり得るかなって。だって、妙に自信たっぷりで堂々とし  
614: てるから。生まれた時からそんな感じで、枕みただったんだらうなあって」  
615: シリア「枕？ どういう意味だそれは？」  
616: セレス「あはっ♪ そっか、キミはまだ知らないんだものね？」  
617: シリア「あとで枕にでも何でもなってるよ。だから、今は……聞け……」